

第 5 回市史講座ミニレポート：平成 29 年 8 月 19 日（土）

「原始古代から見る松江成立の基盤」

●講師：丹羽野 裕 先生（島根県教育庁文化財課長）



今回の市史講座は、原始古代の松江についてご講義いただきました。

一番重要なポイントとして、「松江市周辺は原始古代から一貫して地域の中心地であった」ということを挙げられ、地形とそれに連動した生活スタイルを時代ごとにご説明くださいました。

◆旧石器時代

地形は隠岐まで歩いての移動が可能でした。生活に必要な石材の産出地（隠岐-冠山（広島県）-国分台（香川県））で石を獲得しながら狩猟生活を送る遊動生活をしており、松江はその中心となっていたとされました。花仙山（松江市玉湯町）の玉髄も使用されていたことを理由として挙げられました。

◆縄文時代

地形は海水面が上昇し、陸地は右図のようになりました。山、海の幸などを糧とし、生活スタイルは遊動から定住へと変化しました。

水上交通が可能となり、海へと進出する人・物の移動が生まれ、それに適した生活場所が選ばれたと推測されます。よって水域に近い現在の松江市周辺には遺跡が多く発見されています。



◆弥生時代

地形は縄文時代より砂州が発達した状態となります。現在の宍道湖と中海を大きな潟湖（せきこ）とすると、その周りに小さな潟湖が多くできました。水田稲作が伝わり、生活は集落スタイルへと変化しました。小さな潟湖があった西川津周辺には大規模な集落が形成されたことが分かる遺跡があります。

◆古墳時代

東（ヤマト王権）からの人や物品の移動によって、中海～宍道湖間は集積地として重要な場所となります。現在の朝酌周辺の南北両岸です。物資の流通を押さえることによって力を得た豪族が現れます。そのため大橋川沿い南北両側に東部首長墓が連なるように築かれました。

地形や生活スタイルが変わり続けても、松江はこの後も交通の要、拠点としてあり続けていくと締めくくられました。松江市の現在に至るまでの歴史と、これから未来へつながる松江市の歴史を考えさせられる講義でした。